

谷川俊太郎さんの詩の書体をめぐって 嘘のない書体をつくる

ふだん何気なく読んでしまっている字だが、
そこで使われている書体は、緻密な設計思想と高度なデザインによって、
初めて違和感なく私たちの目に入ってくる文字となる。
詩、そして詩人にふさわしい書体とは？

書体設計士・字工房
鳥海 修

●とりのうみ・おさむ 1955年山形県生まれ。多摩美術大学卒業。79年写研入社。89年に字工房設立。游書体ライブラリーの游明朝体、游ゴシック体など、ベーシック書体を中心に100書体以上の書体開発に携わる。

二つ返事で了解

——詩のための書体をつくる。一年がかりのそのご苦労が『本をつくります』（河出書房新社）を読むと伝わってきます。企画はどうやって誕生したのですか？

きっかけは、「本づくり協会」（*）が、書体に注目した冊子をつくること

いうところから始まりました。僕は以前「本づくり協会」で講演をしたことがあります。それがきっかけで名前だけの会員になっていたのです。

この企画を推し進めた「本づくり協会」の面々が、「谷川俊太郎さんのための書体を作ってください」と依頼に来たとき、僕は、すぐ「やる、やる」と返事をしてしまったんです。

報酬が発生する仕事ではないので、仕事の合間にどうやって時間を作れるかが心配でしたが、十年ほど前に近代文学向けの「文麗」、外国文学向けの「蒼穹」、女流文学向けの「流麗」といった書体をつくったとき、割合うまくいったなと思っていたので、今度も大丈夫だろうと踏んだわけです。ですから、谷川さんの詩に向いた書体をつくるのは、それ

ほど大変な思いをしないのではないかと思ってしまった（笑）。

僕は平野甲賀さんの装丁が大好きで、平野さん装丁の谷川さんの詩集を読んだという程度の読者なんです。詩集が出るたびに読むという熱心な読者ではなく、谷川さんのことをよく知っているわけではありません。ただ、谷川さんのお父さんの谷川徹三さん（哲学者・評論家。一八九五―一九八九）の本や思想に影響を受けたことも多かったので、谷川さんに会ってみたいという気持ちがありました。

興味津々で、本づくり協会のの人とともに、谷川さんのところへ伺い、書体について話をしたのですが、谷川さんは、「僕はあまり活字に興味はないんだよね」と言われてまして（笑）。「自分は詩を書いて、それが自分の手を離れたら、あとは出版社

なり編集者に任せている。だからこの文字で組んでほしいということとは頼着しないんだよ」と。まあ、そうだろうあと思いました。

それでも、良寛の字は好きだとおっしゃったので、良寛の字と、徹三さんの字、二つはいずれも右下がりの字だったのですが、この二人の文字を参考に二パターンつくり、それとは別に、僕が谷川さんをイメージしてつくった書体をつくって、全部で三パターンを、後日、谷川さんにお見せしました。

すると、自分は文字に興味はないけど、あえて言うなら、僕が勝手にイメージした文字がいいとおっしゃってくれたので、これでベースは決まったんです。

ここまでは順調に進んでいると思っていました。そこから苦難の連続でした。

まとめるなんて不遜なこと

——ベースが決まったのに、そこから苦難が始まったのですか？

ええ。仕事の合間にやるので、作業をする日にちが空くということもあって、コンセプトがぼやけてしまったこともありました。谷川さんをイメージした書体をつくったときの気持ちって、どうだったつけ？ なんて探ったりしました。

ふつうで、まじめで、控えめだけど芯があり、それでいて、わざとらしくない文字。まじめだけど生真面目でないという感じ。それはいったいどんな文字なのかを模索し続けたのです。

当然といえば当然ですが、だんだん、谷川さんは、どういう人だろうと疑問がわいてくる。一回や二回会

*本づくり協会 伝統的な本づくりの技術と文化の継承を目的に、本づくりに関わる有志が参加している。本づくり学校教室（横浜と長野・伊那）分室（東京・神田）がある。詳しくは「本づくり協会」ホームページへ。